

日本微生物資源学会第29回大会開催報告

第29回大会長 大熊盛也

第29回の大会は、国立研究開発法人理化学研究所バイオリソース研究センター微生物材料開発室（理研JCM）がお世話をさせていただき、2023年6月21日（水）～23日（金）の3日間、茨城県つくば市の文部科学省研究交流センターにて開催いたしました。コロナ禍の状況で2020年度の大会が中止となり、2021年度の第27回大会はweb配信のオンデマンドでの開催、2022年の第28回大会は現地開催とオンライン配信のハイブリッド開催でしたが、今回は可能な限り現地に参集いただいて活発な交流と意見交換の場を提供したいとの思いから、対面中心の大会とさせていただきました。

本大会には、正会員53名、機関会員11名、学生14名、賛助会員4名、名誉会員2名、非会員11名（招待講演者を含む）の総計95名の参加をいただきました（写真1）。また、株式会社テクノスルガ・ラボ様、bit-Biome株式会社様には企業展示をしていただきました。多数の皆様にご参加いただいたことに深く感謝申し上げます。

21日（水）には、コロナ禍以降オンライン会議で開催されてきた、編集委員会、カルチャーコレクション委員会、理事会在それぞれ対面で開催されました。オンライン会議に比べて熱のこもった討論がなされたようです。

2日目の22日（木）の午前は、口頭発表8演題の一般講演が行われ、会場からの質疑と応答に活発な議論がなされました。午後には、研究発表14件、機関会員活動の紹介8件の計22件のポスター発表がありました。それぞれのポスターの前で多数の人だけができ、熱気にあふれた討論が行われていました。

休憩をはさみ、2023年度就任の矢口学会長を議長に総会が執り行われました。新役員の紹介や昨年度の学会活動の報告が各担当理事からなされ、2023年度の計画等が承認されました。引き続き、学会賞と奨励賞の授賞式、名誉会員推戴式、大会優秀発表賞の表彰、受賞講演が行われました。

日本微生物資源学会賞は、川崎浩子会員（製品評価技術基盤機構（NITE））が、日本微生物資源学会奨励



写真1 全体集合写真

賞は、鈴木重勝会員（国立環境研究所）が受賞なされました（写真2）。お二人にはそれぞれ、「微生物資源センターと標準化：生物資源の品質管理、計測リファレンス、バイオバンク国際標準化への取り組み」、「藻類コレクションとゲノム情報を基盤とした藻類の新たな多様性の解明」と題した受賞講演をしていただきました。お二人の受賞をお祝いするとともに今後のますますのご活躍と学会活動へのご支援を期待しております。また、総会にて江崎孝行先生が名誉会員となることが承認され、推戴式が行われました（写真2）。これまでの学会への多大なるご貢献に謝意を表するとともに、ご健勝にお過ごしになられて今後も学会への叱咤激励などを賜ればと存じます。

大会優秀発表賞については、森雄吾会員（千葉大）「多剤耐性を有する白癬菌株のアゾール系抗真菌薬への耐性機序の解明」、足立椰会員（東農大）「油糧酵母 *Pseudozyma* 属のアラキジン酸およびエイコセン酸産



写真2 学会賞・奨励賞の授賞と名誉会員の推戴
左：学会賞の川崎浩子会員，中央：奨励賞の鈴木重勝会員と矢口学会長，右：江崎孝行名誉会員

生に関する研究」の2名の口頭発表が、また、丸岡直弥会員（東工大）「シロアリ・キゴキブリ腸内原生生物に共生する新規 Deffebacterota 門細菌の発見と1細胞ゲノム解析」、伴さやか会員（千葉大）「薬剤耐性真菌の収集と管理」の2名のポスター発表が、それぞれ受賞されました（写真3）。おめでとうございます。ますますの研究の発展と今後の活躍をお祈り申し上げます。

大会3日目の23日（金）は午前には実務ワークショップの3講演、公開シンポジウムの4講演が行われました。実務ワークショップ「コレクション業務に付随する諸問題～データベースや事務作業の観点から～」は、実務担当者委員会委員長の伴さやか氏による司会進行のもと、山崎福容氏（農研機構 MAFF）に



写真3 大会優秀発表賞の受賞者
優秀口頭発表賞の森雄吾会員（左）と足立椰会員（中左）、優秀ポスター発表賞の丸岡直弥会員（中右）と伴さやか会員（右）



写真4 実務ワークショップ総合討論での会場の様子



写真5 公開シンポジウムでの講演の様子

「NARO ジーンバンク (MAFF) における事務作業支援システムと今後の課題」、浜田盛之氏 (NITE NBRC) に「生物資源管理システムの紹介と業務効率化を目指した改修」、飯田敏也氏 (理研 JCM) に「理研 BRC-JCM における微生物株の寄託・提供業務システムおよび微生物株データベースの運用について」の講演をそれぞれいただき、最後に総合討論が行われました (写真4)。情報・IT の視点から、コレクション関連業務についてのそれぞれの所属機関での状況の説明と事務的な業務の効率化についての課題が紹介され、会場からの質疑と応答に活発な討論がなされました。実務上の課題と解決に向けた取り組みの情報共有に大いに有益なワークショップとなっていました。

公益財団法人発酵研究所からの学会・研究部会助成を受けての公開シンポジウム「微生物の分離・培養を考える」(共催:新学術領域研究「超地球生命体を解き明かすポストコッホ機能生態学」)は、会場の大会参加者に加え、事前登録いただいた一般の研究者にも Zoom オンライン配信を行って、多数の方に聴講していただきました。オンライン聴講の事前登録者は 350 名を超えていました。企画者を代表して筆者 (大熊) から簡単な趣旨説明をした後、青井議輝氏 (広島大) に「多くの微生物が培養困難である理由を探る」、玉木秀幸氏 (産業技術総合研究所) に「未知の微生物を“培養”して新たな生物機能を探る」、井町寛之氏 (海洋研究開発機構) に「私たちは微生物の生き方を捉え直す必要があるかもしれない—海底微生物ハンティングから見えてきたこと—」、橋本陽氏 (理研 JCM) に「真菌類、特に子のう菌門の分離培養とその課題」の講演

をそれぞれいただきました (写真5)。多くの微生物資源関連分野の研究者にとって関心の高い微生物の分離と培養について、優れた成果を挙げられている講演者の方々から、参考になるお話が多数紹介されました。会場からいくつもの質疑もあって大変盛況な、魅力的なシンポジウムになりました。不躰なお願いにもかかわらず講演をお引き受けいただいた講演者の方々には厚く御礼申し上げます。

大会会期を通じて、講演・発表の後に多くの方が会場の外のロビーで議論や交流をされており、対面での大会開催の良さが感じられました。大会参加者にも喜んでいただけたのかと思っています。一方で、開催会場の時間的制約から慌ただしく退出いただいたこと、開催を決める時期の状況から懇親会の開催を断念せざるをえなかったことは大変残念であり、参加者の皆様には申し訳なく思っております。ご理解をいただきましたら幸いです。

本大会は、実行委員を務めてくれた理研 JCM の坂本をはじめとしたスタッフの尽力によって無事に終わることができました。スタッフには不慣れなシンポジウムのオンライン配信や開催会場の確認・打ち合わせに何度も会場に足を運んでもらい、諸々の準備を着実に進めてもらいました。また、ご支援いただきました関係者の皆様にも感謝申し上げます。

詳細は未定なのですが、次回の大会は NITE NBRC の皆様にお引き受けいただいたとのことです。次回大会で皆様にもまたお会いできることを楽しみにしております。